

No.77 市橋 太郎 「94・82」

Taro Ichihashi

北川フラムさんのコラム / 1998 (平成 10) 年 1 月 15 日付 立川市市報記事より

市橋太郎は新潟県の佐渡の生まれである。現代美術の坩堝^{くわく}ニューヨークに渡り、そこでアーティストとして生き抜いていることはたいへんなことだ。そのなかで普通よくある真四角のキャンバスから変形したものに変わって、作品を作るようになった。

ファーレ立川のペDESTリアンデッキは丸い柱が続いているのだが、1 か所だけ、構造上の問題で台形になってしまった。1 か所だけ違う場所はアートにとって望む場所だし、建築設計の側からも、その場所にアートが入って解決してくれると嬉しい話になる。作家は真夏、ここに足場を組んで、絵を描いていた。都市はアーティストにとって、変化に富んだキャンバスなのだ。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

作品タイトル; 「94-82」

一つの新しく生まれる街に、多国籍のコンテンポラリーアーティストたちが、まちの機能に結び付けたアートを作るという事は素晴らしいことである。

アートと人々の生活の結び方として、“ファーレ立川”の実現は、実に画期的である。

アートが閉ざされた世界から出て、現在の日本に、やっこのような形で街の中で呼吸し、人間の歴史を冒瀆しない優れた文化を内包したプロジェクトが実現する。

“ファーレ立川”が芽となって一気にアート、そして美の意味が都市計画や人間の生活環境に浸透するはずだ。

創られた完全さはある真実、事実を消す。

完全さから外れることは、私にとってスリルのある事であった。

不完全な長方形(直方体)、不完全な正方形(立方体)。

完全さを予測できるものでありながらそうではないものを作ること、あるいは完全さから外れる事、飛び出すこと。

垂直線は重力の方向、それに沿う平行線はその確認と視覚上の囁(ささやき)。

斜めの線は、放置されて止められた線一遊び、そしてスリル。

底辺は水平線か地平線。

それに私の意識を這わせ、広げる。

私は以上のような要素を満たす単一、または複数の形体を用いて、1970年代前半から 80年代前半にかけて多数の作品を制作した。

この作品「94-82」のフォームは、この柱の設計者が機能上考え出したものが、偶然に私の一時期の作品と非常に類似したものであった。

10年以上の時が経過したが、私に与えられた柱を作品としてみよう。

近年の私の興味(作品)は相入れないもの、異質な要素、異なる考え方を一つの作品の中に同居、共存させる事である。